

家庭用

彩の国の道徳

埼玉県教育委員会

拝啓　ことわざにも、「教育は、家庭の教えて芽を出し、学校の教えて花が咲き、社会の教えて実を結ぶ」とありますので、学校と家庭とは、常にその方向を同じくし、お互いに力をあわせて、幼い子を社会の悪い風習に染まらせないようにしたいものです。

明治三十一年四月

幡羅高等小学校

資料 『家庭心得』生徒保護者への御注意』より

※幡羅高等小学校は、現在の熊谷市にあった。

保護者の皆様へ

家庭用「彩の国の道徳」の活用について

埼玉県教育委員会では、平成二十三年三月に作成した家庭用「彩の国の道徳」を改訂しました。

家庭用「彩の国の道徳」は、子供たちの規範意識を高め、夢や希望に向かってたくましく生きることができるよう、本県独自の道徳教材「彩の国の道徳」を平成二十一年度に作成したことを受け、家庭と学校が同じ視点に立ち、子供たちの豊かな心をはぐくむために、作成しました。

本書は、以前の家庭用「彩の国の道徳」の内容に、東日本大震災に関連した出来事を題材に作成した道徳教材「心の絆」の資料を追加するなどしております。

子供たちの規範意識や豊かな心をはぐくむためには家庭の教育が大変重要です。

読み物資料については、子供と一緒に読み、登場人物の行動や気持ちについてどんなことを感じたか、自分はどうか、日常生活や真剣に生きていくことの大切さなどを話し合ってみてください。

また、読み物資料の他、相談窓口やチェックシートなど、保護者の皆様にお知らせしておきたい資料も掲載しております。

この家庭用「彩の国の道徳」を日々の子育てに活用していただければ幸いです。

◎学校の「**道徳の時間**」でどんなことを学習したのか、家庭で話題にしてみましょう。

学校の「**道徳の時間**」って どんな時間？



人はだれもが素晴らしい人生を送りたいと願っています。自分が人間としてどのように生きるべきかを考えることはとても大切なことです。そのために、学校には、国語や算数の授業と同じように、週に1回、「道徳の時間」の授業があります。

道徳の時間では、読み物や映像などの資料を活用して授業を進めていきます。授業で活用するそれぞれの資料には、「相手のことを思いやり、親切にしよう」、「約束や社会のきまりを守ろう」などのねらいがあります。子供たちは、資料に登場する人物の気持ちなどを考え、お互いに話し合うことを通して、自分はどのように生きればよいのかを学んでいきます。

また、道徳の時間には、子供たちが自由に話すことができます。例えば、「悪いことだとわかっていても、友達に仲間外れにされるのがいやだから一緒にやってしまう。」という考えを発表する子がいます。一方、「いくら仲のよい友達に誘われても、悪いことは絶対にしない。」という考えを発表する子もいます。道徳の時間では、こうした素直な気持ちをお互いに出し合って自分の考えを深めながら、これからの自分の生き方に生かしていくのです。

一人一人の考えを発表し合いながら、その中で友達の気持ちや考えを知り、また自分の気持ちや考えをクラスみんなに知ってもらう時間です。

道徳の時間とは…



心をピカピカにして、みんなが仲よく、楽しく過ごせるようになるための大切な時間です。

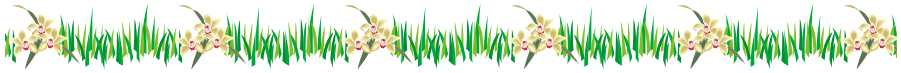
主人公の気持ちを考えたり、話し合ったりすることを通して、ものの見方・感じ方・考え方から自分の生き方を探る手がかりとしていく時間です。

家庭用「彩の国の道徳」

巻頭言 幡羅 ^{はたら} 高等小学校「家庭心得」	1
保護者の皆様へ	2
学校の「道徳の時間」って、どんな時間？	3

【読み物資料】

笑顔であいさつ	元気なあいさつの気持ちよさ	6
静六の勇氣	弱い者いじめに立ち向かう本多静六の勇氣	8
大切な宝物	生命の誕生と家族の絆	10
おにぎりとおみそしる	生活を支えてくれる人たちへの感謝	12
新発売のカード	やってしまった過ち(万引き)を素直に認める大切さ	14
今日のヒーロー	子供一人一人のよさ	16
一輪の花	渋沢栄一の母の真の思いやり	18
わたしのお父さん	世のため人のために働くお父さん	20
道ひとすじに	荻野吟子のあきらめない心	22
盲目の学者	塙保己一の学問を追求する心	24
ありがとう	厳しくも優しい心づかい	26
わたしって何	人の心を傷つける言葉	28
父の一言	靴そろえの大切さ	30
私たちの初詣	携帯電話によるトラブル	33



命のタスキ かけがえない命のつながり 36

「何だっていいんだあ」 家族を思う親の深い気持ち 39

豊かな日本をめざして 渋沢栄一 のよりよい社会を築く姿勢 41

命、今生きていること 命を大切にして前向きに生きる姿勢 44

信じ続けければ、夢は必ず叶う 部活動を通じた夢や目標の実現 46

【コラム等】

埼玉県独自の道徳教材 家庭用「彩の国の道徳」 49

わたしたちの埼玉県 50

埼玉県がナンバーワン！ 51

埼玉県ゆかりの偉人 郷土埼玉の偉人の紹介 52

埼玉県の自然と伝統文化 54

子育ての目安「3つのめばえ」 56

子育ての「さ・し・す・せ・そ」 57

してはならないことがある！ 58

「規律ある態度」を身につけよう！ 59

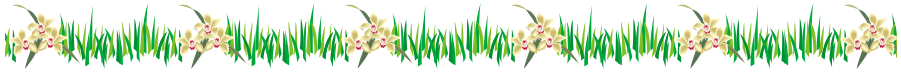
子供のほめ方、しかり方 60

家族で確認、家庭のルール！ 61

今、子供たちの状況は..... 62

家庭用いじめ発見チェックシート 63

一人で悩まず誰かに相談をしましょう 64



笑顔であいさつ

朝、学校へ行く時に、わたしは、通学班のみんなと歩いて行きます。学校のそばの交差点のところに、交通指導をしてくれるおじさんが立っています。わたしたちが、安全に道路をわたれるように、毎朝、見守ってくれています。

わたしたちが近づくと、おじさんは、

「おはよう。」

とにこにこしながら声をかけてくれます。班長さんは、

「おはようございます。」

と明るくあいさつをしています。わたしは（おはようございます。）と、心の中で言いながら、おじさんの方をちょっと見ました。



次の日も、その次の日も、おじさんは、
「おはよう。車に気をつけて行くんだよ。」
と、笑顔でわたしたちに声をかけてくれました。
た。

「おはよう…。」
わたしは、小さな声でつぶやきました。

次の朝、遠くに、おじさんが見えてきました。
た。おじさんは、一人一人に、
「今日は、体育がんばってね。」

などと、優しく声をかけています。前の班で
歩いて行く同じクラスの友達も、おじさんと
あいさつをして、うれしそうです。わたしは、
なんだかうらやましくなってきました。

おじさんがだんだん近くになり、どきどき
してきました。思い切って

「おはようございます。」
と言いました。

おじさんは、わたしの顔を見て、

「おはよう。元気なあいさつだね。今日も、が
んばってね。」

と笑いかけてくれました。それから、みんな
も、顔を見合わせてにっこりしました。心が、
ほかほかとあたたかくなってきました。

彩の国のどうとく「きょうもげんきに」より

静六の勇氣

静六せいりくは、自然の中で遊ぶことが大好きな子でした。いつも近所の子どもたちとみんなまで遊んでいました。

今日は、川で遊ぼうと思い、橋の近くまで来ました。すると、大きな男の子が三人でとおせんぼをしていました。静六は、そばの木にかくれるようにして様子を見ていました。女の子が泣いています。

（弱い者いじめなんかして。よし、助けてやろう。）

と思いましたが、男の子はみんな静六より大

きい子です。

（うーん。こっちは

一人だもんな。一人じゃしょうがないや。）

静六は、知らないふりをしてそこをそつと通りすぎました。

でも、いつも遊んでいる友達が、

（せいちゃん、がんばれ。）

と言っているような気がしてきました。

（そうだ。ほくが言わなくちゃ。）

「おい、弱い者いじめはよせよ。」

静六は、思い切って言いました。



「なんだ。おまえだっけいつもいたずらをしてるじゃないか。」

一番大きな子が静六の肩をつかんで言いました。ほかの男の子もこわい顔でにらみつけました。

「でも、弱い者いじめはしたことないぞ。」

よせよ。」

静六は、顔を真っ赤にしてはつきりした声で言いました。それにおどろいたのか、男の子たちは、

「なんだい。なんだい。」

と、ぶつぶつ言いながら行ってしまいました。

静六は、急に胸がどきどきしてきました。そして、ふうつと大きな息をしました。

「ありがとう。本当にありがとう。」

というと、女の子は走って行きました。橋を渡りきるとにつこりしながら手をふりました。

(ほく、負けなかったぞ。)

静六は、心の中でさげびながら、家に向かって走り出しました。

心優しく、勇気のある静六は、のちに日本の公園の父と呼ばれました。緑を増やすために、進んで多くの仕事をした、「本多静六」は、埼玉県で生まれた人です。

彩の国のどうとく「きょうもげんきに」より

行ってみよう、じぶんでみよう!

「本多静六記念館」

(菖蒲総合支所5階)

久喜市菖蒲町新堀38

☎〇四八〇(八五)一一一一

(菖蒲総合支所代表)



大切な宝物

今年、ぼくに弟が生まれました。

「かわいいだろうな。早く会いたいな。」

赤ちゃんに会いに行く日、ぼくは、思わずスキップをしていました。

生まれてまもない弟は、ベッドで元気に泣いています。

ぼくは、おそろおそろ弟をだっこさせてもらいました。

「お兄ちゃんだよ。いろいろ教えてあげるね。早くいっしょにサッカーをしようね。」

お父さんは、

「よくがんばったね、お母さん。ありがとう。」

う。春人^{はると}、お母さんは、十時間もかかって

赤ちゃんを産んでくれたんだぞ。」

と、言いました。赤ちゃんを産むとき、お母さんは、とても大変だったそうです。

「元気に生まれてよかったわ。ねえ、春人。」



この子の名前を『広人』^{ひろと}とつけようと思うの。『心の広いだれにも温かく優しい人』

になってほしいと思ってるからよ。」

「どうだい。いい名前だろう。この子は、

うちの宝物だよ。」

お父さんとお母さんは、本当にうれしそうに話してくれました。

「うん：。」

それを聞いて、ぼくは、ちよつとうらやましくなり下を向いていました。

すると、お母さんは、にこにこしながら、「春人が生まれたときも、とても大変だったのよ。でも、お母さん、本当にうれしかった。

た。お父さんなんて、前の日から会社を休んで、病院の中をまだかまだかって、歩き回っていたそうよ。おじいちゃんやおばあ

ちゃんもかけつけてくれてね。ねえ、お父さん。」

「そうだったな。『春人』という名前は、家族みんなで相談して決めたんだ。『春の木のようにすくすく育つて、まわりの人を優しく守ってくれる人』になるようにってね。」

「だから、春人も、この赤ちゃんも、わたしたちの大切な宝物なの。」

それを聞いてなんだかくすぐったい気持ちになりました。そして、（ぼくにも宝物ができたんだ。ぼくの『一番の宝物』だよ。）と思いました。

すると、何だか元気がもりもりわいてくるのでした。

おにぎりとおみそしる

小さな白いおにぎりとおみそしる。

これは、わたしにとって、わすれる事のできないごはんです。

わたしは、東日本大しんさいで、自分の家にいられなくなり、ひなん所で生活していました。その時の食事の内ようです。

それまでのわたしは、おやつを食べて、食事の時は、デザートまでありました。それが、あたり前だと思っていました。

とつぜんのさいがいを受け、ひなん所で生活をしてみて、わたしが食べていたものが、とてもめぐまれていた事に気がつきました。何日間も、おにぎりとおみそしるだけを食べていましたが、ふしぎとあれが、食べたい、これが、食べたいとは、思いませんでした。おながすいて、食べる事ができることだけで、うれしかったからです。

白いおにぎりから、中に梅干しが入ったおにぎりになった時は、とてもうれしかったです。

ひなん所から、東京にいどうした時に、はじめて、おかずのついたごはんを食べました。弟が大好きな野菜を見て、

「食べていいの。」

と聞きながら食べていました。とても、うれしそうでした。

今もまだ、自分の家には帰れないけれど、テーブルには、わたしの好きな食べ物がたくさんならびます。季節のフルーツも食べられるようになりました。ひなん所で、テーブルもなく、おふとんをかたづけ、下を向いて食べた小さなおにぎりとおみそ汁の味は、せっ対にわすれません。こまっているわたし達にごはんを作ってくれた人達の事もわすれません。

ひなん所にいた時は、あまりわらう事ができませんでした。でも、今は、わらってごはんを食べています。つらい事やこわい事もたくさんありました。今は、ごはんを食べて、お

ふろに入って、おふとんにねられる事がとてもうれしいし、幸せです。

これからも、食べ物をそまつにしないで、楽しくごはんを食べていきたいと思っています。

(児童の作文より)

彩の国の道徳「心の絆」より



新発売のカード

「じゃあ、明日、一時半に三角公園だね。けんちゃんも、ゲームカセット持ってきてね。」

けんたは親友のいちろうと遊ぶ約束をしてれた。

次の日の日曜日、二人で三角公園のベンチでゲームをして遊んでいると、

「けんちゃん、いつものお店で、おやつを買って食べようよ。」

といちろうが言った。二人で遊ぶときは、この駄菓子屋でお菓子を買って食べることが多い。二人がジュースとお菓子を持って、レジの方に歩き出したとき、テレビのコマーシャルでやっている新しいカードが目に入った。

いちろうは、

「けんちゃん、これ、新発売のやつだよ。」

と小声で言って、足を止めた。

「そうだね。ほしいけど、ぼく、今日はこれしかお金持ってきてないんだ。」

「ねえ。ぼくたちの他に客はいないから、だまってもらっちゃおうよ。」

「だめだよ。そんなことをしちゃ。」

「だいじょうぶ。おばさん、本を読んでもるよ。」

「ええつ。本当にだいじょうぶ…。」

ぼくがしばらく悩んでいると、いちろうはカードを二袋



つかみ、自分のポケットに入れていた。

「これください。」

いちろうがお菓子とジュースを差し出し、レジのおばさんに百五十円を払った。ぼくの胸は、ドッキンドッキンと音を立ててなっていた。

「ぼくも同じです。」

と言って、お金を差し出そうとしたが、震えた手から百円玉を床に落としてしまった。

「大丈夫かい。大事なお金だから落とさないようにね。」

おばさんの優しい声が胸にささった。

ぼくたちはおばさんから逃げるようにお店を出て、公園にもどり、ベンチに座ると、いちろうが一袋のカードをぼくのポケットに入れた。

その日の夕ご飯。家族で食卓を囲んだ。

「どうしたんだ。今日のけんたは変だな。けんたの好き

なハンバーグなのに、それしか食べないのか。」

お父さんの声も耳に入らなかった。みんながテレビを見ながら笑っていても、ぼくは笑えなかった。ぼくはすぐ布団

にもぐりこんだ。

次の朝、なかなか起きられなかった。あのカードのこどが頭からはなれずに眠れなかったからだ。

（やっぱり、このままじゃだめだ。）

ぼくは、力をふりしほって起き、昨日の出来事をお母さんに話すことにした。

「お母さん、ぼく、いちろうくんと二人でカードを盗んじやった……」

全部言い終わらないうちに涙で声が出なくなってしまった。お母さんは、今までに見たこともないくらい、悲しい顔をしていた。

「ぼく……あやまって、返しに行く。」

お母さんの目は涙でいっぱいになった。

その日、学校が終わってから、あの駄菓子屋にお母さんと一緒に謝りに行き、カードを返した。

「もう二度とするんじゃないよ。」

おばさんの悲しそうな目が心に重く残った。

彩の国のどうとく「みんななかよし」より

今日のヒーロー

わたしのクラスでは、毎日帰りの会に、今日がんばっていた友達を見つけ、発表し合う「今日のヒーロー」というコーナーがあります。わたしは、洋子さんのことを発表しました。

それは、昨日の昼休みのことでした。わたしは、雨が降っていたので図書室へ行き、この間から読みたかった本を見つけました。座って読み始めようとしたときです。ななめ奥の方にとんと静かに座っている一年生がいました。時おり、にこっとしながらじっと絵本を見つめています。となりの席を見ると、わたしのクラスの洋子さん

でした。わたしは、じゃまをしてはいけないと思い、だまって自分の本を読み始めました。

そして、今日も朝から雨だったので、また、図書室に行きました。図書室の入り口で部屋を見わたすと、今日も洋子さんはあの一年生に本を読んであげていました。

（どうして、毎日一年生に本を読んであげているのだろう。）

教室にもどり、洋子さんにそのわけを聞いてみました。すると、

「わたしは、本を読むことが好きなの。それに、小さい子のお世話もすきだから、一年生に絵本を読んであげ



ようかなと思っただけ。」

「そう。一年生も喜ぶね。」

「これからも、小さい子にたくさん本を読んであげたい
など、思っているの。」

と目を輝かせながら、話してくれました。

帰りの会で、わたしは昨日と今日の洋子さんの様子を
クラスのみんなに伝えました。先生は、

「人はだれでも必ずいいところがありますよ。みなさん、

自分のよいところを見つけてみてくださいね。」

とおっしゃいました。

(わたしのいいところって何だろう。)

家に帰り、考えていると、

「どうしたの、まゆみ。何かあったの。」

お母さんが心配そうに話しかけてきました。わたしは、学
校であったことや先生の言葉をお母さんに話しました。

「まゆみのいいところ、あるわよ。この間、たけしくん
が仲間外れになっていることに気づいて、仲間に入れ

てあげたじゃない。たけしくんのお母さんに『まゆみ

ちゃん、やさしいわね。ありがとう。』って何度も言わ

れたわよ。それに、おばあちゃんが入院したとき、毎
日お見舞いに行ってくれたでしょう。まゆみの励まし

で、おばあちゃんが元気になったのよ。いいところ、ま

だまだあるわよ。自分でもさがしてごらんさい。」

「そうかあ。お母さん、ありがとう。」

(そういえば、先生に『まゆみさんの気持ちのよいあい
さつを聞くと、元気が出るわ』と、ほめられたつけ。そ
れから…。)

夕食のとき、お母さんに

「わたしのいいところ、他にも見つけたよ。」

と話しました。

「よかったわね。今日の我が家のヒーローはまゆみに決
定！」

と言うお母さんの言葉に、わたしは笑顔になりました。

彩の国のどうとく「みんななかよし」より

一輪の花

一八四〇年、しぶさわえいいち洪沢栄一は、ちあらいじま血洗島村（現在の深谷市）に生まれました。

栄一が十歳のころのことでした。近所に、長い間重い病気にかかり、たった一人で暮らしているりんという娘がいました。娘の病気は人にうつるとうわさされ、だれも訪ねる人はいません。しかし、栄一の母えいだけはいつも娘の体のことを心配し、訪ねていました。

今日も、栄一に

「りんさんのところへ行きますよ。」

と母が声をかけますが、

「ぼくは行きたくありません。」

といやがりました。しかし、母は栄一の言葉を気にもと

めず、

「そんなことを言わずに

出かけましょう。」

と誘いました。娘は、うす暗い部屋の中で一人ぼつんと座っていました。母が

「少しですが、野菜を持って来ましたよ。早く元気になってくださいね。」

と言うと、うれしそうな顔をしました。

しかし、栄一は娘のそばまで寄れませんでした。

ある日、娘がいつものお礼にと、ぼたもちを作り持ってきました。着物のふところから、そっと包みを差し出すと、

「おいしいねえ。いいお味よ。」



母は、おいしそうにぼたもちをほおばったのです。栄一は障子の影から、そっと二人の様子を見ていました。娘が帰るとすぐに、

「お母さんが病気になったらどうするんですか。」

と、母を心配しました。しかし、

「あら、そんなことはありませんよ。お医者様は『うつりません。』とおっしゃったわよ。それに、わたしが食べることによって、あの子はどんなに喜ぶでしょう。」

とニコニコしながら話しました。

自分の部屋にもどっても、栄一は母の言葉が頭からはなれませんでした。

このころ、鹿島神社^{かしま}の境内には、井戸がありました。この井戸水は、病気によく効くと言われ、その水を使って神社のとなりで共同風呂が建てられていました。風呂には、村の人だけでなく近所の村からも多くの人が入りに来ていました。

「りんさんをお風呂に連れて行きます。」

と、母はまた、出かけていきました。

母が娘と風呂にやってくると、風呂に入っていた人た

ちはあわてていなくなりました。

母は、そんなことは気にせず、

「さあ、背中を流しましょう。」

と、娘の背中をやさしく流し始めました。

「おかみさん。ありがとう。」

と娘は涙を流しました。

その後、娘はだれに見送られることなく、亡くなりました。栄一は、娘の墓に一輪の花をたむける母の姿をそっと見つめていました。

栄一は、九十一歳でこの世を去るまで、世の中の困っている人のために働き続けました。それは、優しい母への姿が栄一の心の中に生き続けたからです。

彩の国のどうとく「みんななかよし」より

行ってみよう、調べてみよう!

「渋沢栄一記念館」



深谷市下手計一二〇四
☎〇〇四八(五八七)一一〇〇



SAITAMA

わたしのお父さん

わたしの家は、米作り農家です。農作業が忙しい時は、わたしも家族の手伝いをしています。

お父さんには、もう一つ仕事があります。それは、地域の消防団です。地域で火事が起きたとき、消防士さんと一緒に火を消し人を助ける仕事です。だから、家でのんびりとくつろいでいるときも、夜遅くみんなが寝ているときも、火事で電話がかかってくるとお父さんは急いで出動します。

今日はわたしの誕生日。家族みんなでお祝いをしていると、突然、電話が鳴ったのです。遠くで消防自動車の

サイレンの音がします。火事です。お父さんは、大急ぎで消防団としての支度を始めました。

「今日はわたしの誕生日だから、行かないですよ。」

「ごめんな。困っている人を助けに行かないとな。」

お父さんは、走って出て行きました。

（わたしの誕生日だっていうのに…。）

わたしは、やり切れなさと火事の現場に向かったお父さんのことが心配で、ずっと眠れずにいました。

お父さんが帰って来たのは、十時過ぎ。



となりの部屋から、お父さんとお母さんの会話が聞こえてきました。

「お帰りなさい。火事どうだったの？」

「家が一軒全焼だったよ。由美よりもっと小さな子がいる家だな。でも、何とか全員無事に助けることはできたんだ。」

「よかったわ。みんなの命が助かって。」

「…これからの生活のことが心配だな。家族みんなで生きていかなくちやならないからな。」

わたしは起き上がり、ふすまを開けると、お母さんがお父さんの肩をたたいていました。

「ああ、由美。今日は、由美のお祝いが途中になってしまったね。」

お父さんが優しく言ってくれました。

「ううん、いいの。お父さん、農家の仕事で疲れているのに、どうして消防団もやっているの。」

わたしは、いつも思っていたことを思い切っけて聞いてみました。

お父さんはちょっと考えてから言いました。

「そうだなあ。地域の人がお互いに助け合いながら生活しているから、みんなが安心して暮らせるんだよ。少しでも人の役に立ってるのは、うれしいことなんだ。みんなのためであり、自分のためでもあるんだよ。そして、何より、大事な由美には、いつも元気いっぱい、安心して過ごしてほしいからなあ。」

お父さんの目には、わたしが映っています。お母さんも大きくうなずきました。

わたしは思わず、お母さんと交代してお父さんの肩を、心をこめてたたき始めました。

彩の国のどうとく「みんななかよし」より



道ひとすじに

— 日本最初の公認女性医師荻野吟子 —



写真提供：熊谷市教育委員会

「名主の五女として生まれたわが国女医の元祖 荻野吟子
—」

昭和十一年三月二十五日の『東京日日新聞』、日本女医公認五十周年祭の記事である。

この新聞記事の主人公荻野吟子は、武蔵国幡羅郡俵瀬（現在の埼玉熊谷市俵瀬）に、嘉永四年（一八五一年）、名主を代々つとめてきた家に生まれた。

若くして病気になる、東京の病院に四年間入院した。この苦しい病気との戦いから、吟子はある一つの決意をもった。（自分と同じような病気のために、どれだけの女性がつらい思いをしていることか。こうした女性を救いたい。）

明治三年（一八七〇年）、吟子十九歳のことであった。

医者になろうと決めた吟子は、懸命に勉強に励んだ。明治十二年、吟子はすばらしい成績で女子師範学校を卒業した。

そして、吟子は医者への志望を先生に申し出た。

（女性が医者になりたいとは…。）と、初めは驚いた先生も、吟子の並々ならぬ決意を認め、当時の有力者である、石黒先生（軍医監石黒忠恵子爵）を紹介してくれた。

石黒先生は吟子の熱意に打たれ、医学校を二、三紹介してくれた。ところが吟子は、どの医学校からもみな断られてしまった。女性で医者になるものは、未だ誰一人としていなかったのである。

家族や周りの人たちも吟子の医者志望に反対した。

「何で女が医者になるんだ。女の医者なんてどこにもない。それに、そんな体で医者なんてできるはずがない。」

やっこのことで、石黒先生が紹介してくれた医学校の一つ、*『好寿院』に入学することを特別に認められた。

吟子は学費を得るために、家庭教師を二つも三つもかけ持ちした。そして、雨の日も風の日も四キロの道を歩いて学校

に通い続けた。

しかし、そんな吟子に周囲の目は冷たかった。もとは、女性の入れない学校である。吟子の通学姿は、男用の袴に高いげた。まさに男そのものになるしかなかったのである。

「あのかっこうはどうだ。男か、女か。まったく女が医者になろうなんてとんでもないことだ。」

男子生徒から指をさされて笑われた吟子は、恥ずかしくても顔も上げられなかった。

吟子はそんな自分を何度も励まし、勉強を続けた。そして三年間通い続け、優秀な成績で『好寿院』を卒業した。

ところが、女性であるため、医学校を卒業しても、医者になるための開業試験が受けられない。吟子は何度も願書を出したが、戻されてしまった。

(もうだめなのか…)

しかし吟子は、くじけなかった。なんとか医者になる道を探した。たくさんの人に医者になる方法はないかと尋ねたり、何度もお願いしたりした。日本の制度で医者への道が閉ざされるなら、外国に行つて試験を受けてもいい、とさえ考えた。当時は、外国へ行くということはとても大変なことであつた。吟子の強い意志に、石黒先生を含む周囲の人たちは深く感動し、女性が医者になるための試験を受けられるように、働きかけてくれた。

そして、吟子の努力と周囲の人たちの親身の協力が、ついに当時の*衛生局に認められた。

「学力がある以上は開業試験を受けてよろしい。しかし、医学を修め、試験を受けるのは女性で初めてだ。」

やつとこのことで吟子は開業試験を許してもらうことができた。このとき、吟子の胸には今まで以上に熱いものがこみあげてきた。

明治十八年、大変難しいとされていたこの試験に見事合格した。そして、輝かしい医者への道が開けていくのだった。

吟子三十五歳、日本で初めての公認女性医師の誕生であつた。

吟子が道を開いてから五十年がたった昭和十一年五月、日本女医公認五十周年祭が行われた。このとき、日本全国の女医の数は実に三千四百人にも達していた。

*好寿院：下谷練堀町（現在の秋葉原）にあった私立の
医学校

*衛生局：当時、日本の医療行政などを担当したところ

彩の国の道徳「夢にむかって」より

行ってみよう、調べてみよう!

「荻野吟子記念館」



熊谷市俵瀬五八一―
☎〇四八（五八八）一三二七



SAITAMA

盲目の学者

—「群書類従」に「いどんだ塙保己一」—



写真提供：本庄市教育委員会

現在の本庄市で生まれた保己一は、小さいころ、重い病気で目が見えなくなった。保己一は十五歳の時、江戸に出て、あめとみけんよう雨宮検校の弟子となった。最初は、はりなどによる治療の仕方を教えられたが、生まれつき大変不器用で、習っても習っても、他の人と同じように覚えることができなかった。

「先生、わたしはいくら教えていただいても上手になれません。才能がないのです。」

「保己一、はりなどは上手になれなくても、お前は、小さいころから物を覚えるのが良かったではないか。」

「はい、先生。わたしは学問を習いたいのです。」

「目の見えない者が学問の道に進むのは、さぞ苦勞も多なことだろう。しかし、どうしてもというなら、やってみなさい。そのかわり、三年たつても学問が進まなかったら、故郷に帰ってもらうぞ。」

検校はそういつて、保己一を励ました。

学問を習うといつても、保己一は自分で本を読むことができないので、本を読んでくれる人を探し、その人が読む内容を一生けん命に聞いて覚えるのであった。

本を読んでもらうたびに、保己一の心の中に新しい世界がぐんぐん広がっていった。じつと食い入るように耳をかたむけて聞く保己一の熱心な態度に感心して、本を読むことを申し出る人も、少しずつ増えていった。こうして保己一は、萩原宗固はぎわらむねこという学者をはじめ何人もの先生について学問を習い、やがて、弟子をもつようになった。

保己一は、学問を続けていくうちに不便だなと感じることがよくあった。それは、一つのことを調べるのに、関係のある本が別々の場所があり、みんなばらばらだったからだ。ことに小さい本は、書かれている内容が大切であつて

も失われてしまうことがよくあった。これではいけない。これらの本を項目ごとにまとめ、整理できないだろうかと考えるようになった。

保己一はめずらしい本を持っている人の話を聞くと、貸してくれるまで何度も出かけていった。

古い本を集める仕事は、江戸の近辺だけでなく、だんだんに広がっていった。京都・大阪までの資料集めの旅は、八回にもおよんでいる。

集めた書物の中には、傷んでいて読みとることが難しいものもあれば、その内容が正しいのかどうか不明と思われるものもあった。多くの書物を集め、それらを一つ一つ比較し、後の世に残す価値があるものを整理していったのである。

この全集の編集に取り組んで、四十年が過ぎようとしていた。

保己一は、このようにして六百六十六冊の「群書類従」という全集を完成させた。この本を一冊発行するためには、その三倍から十倍の資料を調べ、本当のことを確かめていかなければならなかった。

「先生、いよいよ完成ですね。」

「月日のたつのは早いものだね。目の見えないわたしが、多くの古い書物を集めることは、並大抵のことではなかった。それらを整理して六百六十巻余りにまとめ、後の世の人たちに残すことができたのは、わたしの生涯に

おいてもっともうれしいことだ。」
保己一は、目に涙を浮かべながら語った。

こうして、古い時代のめばしい記録は、たいてい集められ、うっかりするとどこかへ行ってしまったかも知れない大切な資料を、きちんと全集にまとめることができた。この大きな仕事のおかげで、私たちは日本の昔のことを正しく知ることができるようになった。国文学や歴史学をはじめいろいろな研究をする人にとって、保己一の残した仕事がどんなに役立っているかわからないほどである。

例えば、江戸時代の終わりころ、日本とアメリカ、ロシア、イギリスとの間で、小笠原諸島は、どこの国の領土なのかということが問題になった。この時、保己一が創立した和学講談所^{わがくこうだんじょ}という学校が保存していた資料によって小笠原諸島は日本の領土であることが証明されたのである。

彩の国の道徳「夢にむかって」より

行ってみよう、調べてみよう！

「埴保己一記念館」

本庄市児玉町八幡山四四六

☎〇四九五(七二)六〇三二

※平成二十七年七月(予定)から左記住所に移転します

本庄市児玉町八幡山三六八



SAITAMA

ありがとう

由美は、小学校六年生だ。冬休みに入ってすぐのこと、「由美、この書類をおばあちゃんの所に持って行ってほしいんだけど、お願いね。お母さん、今日は仕事で行けないうんだけど由美一人で、もう大丈夫だよね。」と、お母さんからおつかいをたのまれた。

由美は、一人でバスに乗って行くのは少し不安だったが、「うん、大丈夫だよ。」とお母さんに返事をした。

おばあちゃんの家は隣の市で、バスで三十分ほどのところにある。由美の家は、町外れにあるので、折り返しのバス停まで、お母さんが車で送ってくれた。

バス停には、八時二十五分発のバスがもう来ていた。中に入ると、何人かもう乗っていた。出発時刻になり、バスが動き出した。由美は、さいふの中味を見て、細かいお金

が不足していることに気づいた。席を立ち、両替機を使うおうとした時、

「危ないよ。バスが動いている時は、両替機を使わないようにして。」

と、運転手さんから、きつく注意された。

由美は、他のお客さんにも見られ顔を赤くして席にもどった。

次のバス停で、高校生の男の人たちが数人バスに乗ってきた。それぞれ携帯電話を持っていて、何か操作していた。その中の一人に電話がかかって来たのか、呼び出しの音楽がバスの中に鳴りひびいた。バスの運転手さんが、マイクを使い、

「バスの中では、携帯電話の使用はご遠慮ください。」と呼びかけた。

高校生たちは、運転手さんの方を向いて何かぶつぶつ言



いながら携帯電話をしまった。

由美は、無事に、おばあちゃんの家に着いた。

「由美、えらかったね。一人でバスに乗って来たんだ。今日は一日うちで遊んでいくといいよ。」

と、おばあちゃんが言ってくれた。おばあちゃんの家には、同い年のいとこもいるので、楽しく一日を過ごした。夕方になったので、家に帰ることにした。家に電話をしようと、仕事から帰ってきた母が出て言った。

「由美、おつかいありがとう。帰りのバスが着く時刻に合わせてバス停まで迎えに行くからね。」

帰りは、おばあちゃんがバス停まで送ってくれた。バスが近づいてきて、運転手さんを見ると朝のバスと同じ人だった。終点のバス停に着くと、窓から母の車を探した。乗っていたお客さんはみんな降りてしまい、一人だけになってしまった。

運転手さんに、

「どうしたんだい。」

と聞かれたので、また何か言われるかと思ってどきっとしたが、私は正直に、

「迎えに来てくれるはずの母がまだ来てないのです。」
と言った。

お金をはらってバスを降りようとすると、運転手さんが、

「お母さんが来るまでバスの中で待つといい。外は寒いから。」

と言った。

いいのかなと思いつつも、バスの中で待たせてもらうことにした。

母の車がやっと来た。

「母が来ました。ありがとうございます。」

と、お礼を言ってバスを降りた。

「お母さん、時間は分かっているのにどうして待っていてくれなかったの？」

由美はちよつときつく言った。

「ごめんね。出かけるときにお客さんが来て遅くなってしまったの。」

そんな会話を母としながら、バスを見ると、普段は、行き先を示す正面の表示板が、「貸切」となっていた。思わず母と顔を見合わせた。

バスは、表示板を「回送」にかえて車庫へ向かって動き出した。

彩の国の道徳「夢にむかって」より



わたしって何

幸恵のクラスでは、最近人気のテレビタレントの話題がよくでる。

「昨日の番組に出ていた芸人さん、おもしろいね。」

「『おまえは、この世から去れ！』っていうギャグ、最高だよね。」

たわいのない話ばかりだったが、友達と共通の話題で盛り上がるのが、楽しくて仕方がなかった。

お母さんは、少し心配しているようだった。

「まさか、友達を傷つけるようなことを言っていないわよね。」

「大丈夫よ。心配しないで。友達が悪口や人をけなしたりするようない言わないから。」

幸恵はきっぱりとお母さんにそう言った。余計な心配で

楽しみをうばってほしくなかったからだ。

ある日のこと、幸恵が教室そうじをしていると、小さな封筒が落ちていた。「秘密」という文字が書かれていた。

幸恵は、拾い上げた。読むのは悪いと思ったが、「秘密」の文字がどうしても気になった。そこで家に帰ったあと、自分の部屋でこっそり読んでみた。

小さな紙切れに走り書きの文字がならんでいた。

「幸恵って、このごろ生意気だと思わない？ 気に入らないな。本当に『この世から去れ！』って感じ。（笑）」

幸恵はまさか自分のことが書かれているとは思わなかったのだ、一瞬目をうたがった。しかし、何度読み返しても、書いてあるのは自分のことだった。今まで何気なく



使っていた「この世から去れ」という言葉が心に鋭くつきささった。胸が苦しくなり、涙がこみあげてきた。

「わたしって何…。わたしは友達から嫌われているの。わたしって、この世からいなくなればいいと思われているの。」

幸恵は、何をするのもいやになった。お母さんの顔を見るのもつらくなり、一人で部屋にこもっていた。

「わたしって何なのだろう。みんなからいやがられている存在なのだろうか。本当にこの世からいなくなつた方がいいのかな…。」

幸恵は『この世から去れ』の言葉が頭から離れず、涙があとからあとからこぼれてきた。

どのくらい時間が過ぎたのか、窓の外はだいぶ暗くなつていた。ふと窓ぎわに飾つてある写真が目に入った。幸恵が生まれたばかりにとつた写真だ。家族の真ん中で小さな自分が楽しそうにはしゃいでいる。お父さんもお母さんもうれしそうな顔で写っていた。

幸恵は、その写真をしばらく見つめていた。

「幸恵、夕食の時間よ。」

お母さんが部屋をのぞきこんで声をかけた。その声を聞いて

て、幸恵は思いつめてカチカチに固まっていた心が少しほどけるような気がした。

「お母さん、わたしがいてよかった？」

思いもよらない言葉が幸恵の口から出てきた。お母さんは、一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに笑顔にもどつて言った。

「そうね…。幸恵のいない世の中なんて考えられないわ。幸恵は、家族の宝物よ。」

「わたしは、宝物…。」

幸恵は暗い自分の部屋から出た。食卓はおいしそうなにおいでいっぱいだった。

彩の国の道徳「夢にむかつて」より



父の一言

私の父は、七十六歳になった今もまだ健在です。工芸の職人である父は、若い頃から誰の助けも借りずに自分の腕一本で生きてきました。

私は兄と二人兄弟でしたが、父は私たちに「勉強しろ。」と言ったことはありません。特に私たちの教育に無関心だったわけではありませんが、今思うと、「おまえたちが勉強しようとしまいと、それはおまえたち自身の問題だ。」という気持ちでいたのかもしれない。しつけについても、特にうるさく言われたことはないのですが、ただ、だらしがないことだけは嫌いでした。そして、「脱いだ靴をそろえろ。」ということとはよく言っ

ていました。

私が中学校二年生の頃のことです。家族で夕食を食べながら学校の話をしていました。

ちょうど二学期の中間試験の後だったので、テストの話になりました。その頃の私はクラスで真ん中くらいの成績でしたが、テストではいつも思ったようには点数が取れませんでした。簡単な計算を間違えたり、記号で答える問題を語句で答えてしまったり、要するに「うっかりミス」がとても多かったのです。自分でもそれは分かかっていて、何とかしなければと思っては



いたものの、なかなかそううまくはいきませんでした。

その日も食卓でそんな話をしていました。父はいつも私たち兄弟や母の会話を黙って聞いているだけなのですが、その日は珍しく口を開きました。

「おまえはいくら言っても靴をそろえることができない。だからテストでも思うようにできないんだ。」

私はそんな父の言葉を意外に思いながらも、少しむっとして、

「そんなこと、関係あるわけじゃないか。靴そろえななかができたって、テストで点は取れないよ。」と反論しました。すると父は、

「おまえ、今『靴そろえなんか』と言ったな。でもおまえはその『なんか』すらきちんとできないじゃないか。偉そうなことはできるようにしてから言え。」

この言葉に私は、はっとさせられました。同じようなことを数日前に顧問の先生から言われたばかりだったからです。

当時、私はテニス部に所属していました。私は経験

者ということもあり、春の大会では二年生ながらメンバーに選ばれていて、上級生の中でもある程度の成績を残していました。

だから自分たちの代になった今回の新人戦では悪くてもベスト4以上、県大会出場は間違いないと思っていました。ところが結果はベスト4どころか予選敗退。悔しくて泣いていると、顧問の先生に呼ばれました。先生は、

「なぜ負けたのか、よく考えろ。どうだ、高橋。」

そう聞かれて、私は、サーブが思うように入らなかったとか、決めようと思ったボールがアウトになったとか、そんな答えしか返せませんでした。すると先生は、「そんなことではないんだよ。いつも言っているだろう。テニス以前に、中学生としてやるべきことがしっかりできていたかどうか考えろ。例えば今朝、この会場に来たときに他校の先生に大きな声であいさつができたか。毎日の練習の時、大きな声が出せていたか。服装がいい加減になったりしていなかったか。原因は

そういうところにもあると私は思う。それができれば、きつと春の大会は勝てる。そんなところから、もう一度見直してみるんだ。分かったな。」

先生は論ずようにそう言ったのです。その時は負けただばかりの悔しさもあつて、(何であいさつや服装と関係あるんだよ。あいさつなんかできたつて、試合と関係ないじゃないか。)と思つたのですが、父の一言で、先生に言われたこの言葉を思い出しました。確かに何事にも詰めの甘い自分の大本は、そういうところにあるのかもしれない、そう思つたのでした。

その後、私は極力脱いだ靴をそろえるように心がけました。それによつて、うっかりミスが減つたかどうか、それはあまりはつきりとは覚えていないのですが、とにかくそれは大人になつた今日まで続いています。

父は今でも元気で仕事も続けています。その仕事場には、

『外相整つて、内相自ずから熟す』

という言葉が貼つてあります。「身のまわり、姿かたち

をまず整えていれば、自然と人間の中身も充実してくる」という意味です。自分の技術以外に何も頼るものなかつた父は、自分自身をそうしていましめながら今日まで生きてきたのです。そんな父のこだわりの一つが「靴をそろえること」だったのでした。

靴をそろえることと仕事。一見、何の関係もないような気がしますが、そこには父の生き方が象徴されているような気がします。

『外相整つて、内相自ずから熟す』
作品一つで勝負する父の、自分へのいましめの言葉です。

彩の国の道徳「自分をみつめて」より

私たちの初詣

「5、4、3、2、1。ハッピーニューイヤー。」

テレビでのカウントダウンと一緒に私は、携帯電話の送信ボタンを力強く押した。いよいよ新しい年の始まりだ。今年も良い年になってほしいなあと、私は携帯電話を閉じた。しばらくすると携帯にどんどんメールが送られてきた。『あけましておめでとう^(M)、今年もよろしく』のデコメールで、どの画面にもぎやかだった。それをきっかけに、新年のメールのやりとりに追われた。やりとりが一段落した頃、私は優子からの返信がないことに気づいた。優子は今のクラスになって仲良くなった友達だ。部活動も同じなので、何かと一緒にいることが多く、今は何でも話せる一番の友達だ。

「ねえ、優子だけ『あけおめメール』が来ないんだけど。」

真希からのメールだった。

「優子の事だから、もう寝てるよ。」と返した。

「私たちのことシカトかな。」今度は別の友達からだ。

「シカトってことはないと思うけど。」と返した。

「明日、いやもう今日だね。うちらで初詣に行かない？」

真希からまたメールが来た。

「いいね。行く行く。」私は返信した。

「じゃあ、九時に神社で。」

「オッケー。優子は？」真希に送った。

「優子はメール来ないからいいんじゃない？」



私は一瞬優子のことを考えたが「そうだよね。」と、同意すると、

(メールを返してこない優子が悪いんだよ。)

そうつぶやいて携帯電話を置いた。

約束どおり九時になると、メールのやりとりがあった六人が集まった。みんなでお参りの行列に並んだ。時々優子の事が話題になった。「メールをしてこないなんて、友達じゃない。」など、その場にいない優子のことになると思いきや、ちょっとそれは言い過ぎだなあと思いつつも、私は適当に話を合わせた。そのうち誰かの携帯が鳴り、それぞれ別の友達とのメールを楽しみだした。ふと気がつくとい人は一人ぼつんとしていた。みんなそれぞれ携帯の画面に夢中なのだ。

「せっかくみんなが集まったのに……。」

私も携帯を開いた。

お参りも終わり、屋台でクレープを買って食べていると、真希が

「優子が来てるよ。」

と、声をひそめて言った。そっと見てみると、優子は家族でお参りの列に並んでいた。家族で楽しそうに話をしていて、優子が私たちに気づかなければいいなあと、私は目を伏せた。

しかし、真希が大きな声で「優子ー」と叫び、優子に手を振った。優子は気づいて手を振り返してきたが、私たちが一緒だとわかって、急に気まずそうな顔をして手を引つ込めた。

「見た？今の優子の顔。メールを返してこないからだよ。もう友達じゃないって送っちゃおう。」

と、真希がメールを打ち出した。

「ちょっと。真希、待って……。」

私はとっさに真希の携帯を取り上げた。

その日の午後、ポストには年賀状が届いていた。ここの何年か、私はメールで友達と新年のあいさつをしていたので、ほとんど自分宛にくるものはなかった。それでもこれまでの恒例で、私が家族の年賀状を振り分けていた。(お父さん、お母さん、お父さん、お父さん、お父さん……。) どんどん振り分けていく。ふと、

自分宛の年賀状があることに気がついた。誰からだろうとよく見ると、それは優子からのものだった。私の好きなアニメのキャラクターが、そっくり丁寧に描かれ、「私の大好きな美香子へ、友達になつてくれてありがとう。今年もよろしくね。」と書かれていた。思わず年賀状を振り分ける手が止まってしまった。年賀状を見ると、優子が私のためにキャラクターを選び、一生懸命イラストを描く姿が目に見えるようだった。

しばらくすると「優子から年賀状がきたよ。私の好きなアニメのキャラクターが描いてあったけど、今さら遅いよね。」と、真希たちからメールがきた。「そうだよね……。」と、私は反射的に文字を打ち始めたが、ふと頭を上げた。そして、携帯の画面に視線を落として一文字一文字ゆっくりと文字を消去した。私は深呼吸を一つすると、真希に思い切つて電話をかけた。「私、優子に謝りたい。ねえ、優子を誘つてこれからもう一度初詣に行かない？」

私の心臓はどきどきと波打っていた。しばらく沈黙が続いたが、

「また行くのかあ。でも美香子の言うとおりかも。」

という、真希のちょっと照れたような声が返ってきた。

「優子、私たちだけで初詣に行つてごめんね。」

みんなで優子に素直に謝つた。優子は黙つて首をふつた。私はバッグから一枚の年賀状を取り出すと、

「優子、本当にごめんね。住所を書く時間もなかったんだけど。」

と、消えそうな声でやつと言つた。優子は、年賀状に描かれた私と優子の似顔絵を見ながら、

「美香子、ありがとう。」

と言つて、にっこり笑つて両手で受け取つた。優子の笑顔を見たら、何だか急にうれしくなった。メールもいけれど優子の顔を見てちゃんと覚えてよかった。

「じゃあもう一度初詣に出発だあ。」

と、真希が元気に言つた。みんなが顔を見合せて笑顔でうなずいた。

彩の国の道徳「自分をみつめて」より

命のタスキ

「うちの親ってさ、すぐくうるさいんだよ。門限とか厳しくて、放っておいてほしいよね。」

「そうそう、うちもだよ。ケータイの使い方とか、誰と話してるとか。いちいち聞いてくるし。関係ないよね。でもそろそろ帰らないといけないんじゃない？ 子どものうち、門限うるさいでしょ。」

「ほんとだ。でも、もうどうせ間に合わないし。いいよ、もう少し話をしよう。」

今日も学校帰り、友達の美加と話していた。



私の親、特に母親はいちいち私のすることに口をはさんでくる。ほんとにうるさい。確かに心配してくれるのはわかるけど、もう少し自由にしてほしいと思う。この前だって、門限をちょっと遅れたらものすごく叱られた。

「今、何時だと思っているの。約束の時間過ぎているじゃない。誰とどこに行ってたの。」

「友達と立ち話をしていたら時間がたっちゃって。これでも、他の子より早く帰ってきたんだよ。」

「他の友達はまだ遊んでいるの？ こんな遅くまで遊ん

でいるような子と付き合うのはやめなさい。」

友達のことを言われて私は声が大きくなった。

「私がだれと付き合おうとお母さんには関係ないでしょう。もっと自由にさせて。放っておいてよ。」

「わたしの大事な娘であるあなたを放っておくことはできないわ。」

「ほんとにうるさい。好きであなたの娘に生まれてきたわけじゃないのよ。」

と、思わず言ってしまった。

それから、しばらく母と話ができなくなってしまった……。

ある日、私は保健の授業で生命の誕生について学習した。助産師さんからの話を聞いた。そして、赤ちゃんが生まれる様子をビデオで見た。顔を真っ赤にして一生懸命赤ちゃんを産もうとしている母親の姿を見るのは辛かった。でも、元気な赤ちゃんが生まれたとき

は、思わず涙が出ていた。

「出産は決して安全ではありません。命に関わることもあります。母親は命がけで子どもを産みます。あなた方も命がけで産んでもらい、生まれてきたのです。」と助産師さんは話された。そして、最後に生まれたばかりの赤ちゃんとはほぼ同じ重さの人形を抱いてみた。

助産師さんが、「これが『命の重さ』よ。」と言って私にその人形を渡した。実際はそれほど重くないが、私の両腕はものすごく緊張していた。

その日、私は勇気を出して母に保健の授業の話をした。そして、私が生まれたときの様子を聞いてみた。すると母は私のことでなく母自身の生い立ちを話し始めた。

「お母さんはね、本当の両親を知らないの。あなたが知っているおじいちゃんとおばあちゃんは、お母さんのおじいちゃんとおばあちゃんなの。」

「えっ、じゃあ私の、ひいおじいさんとひいおばあさんってこと?」

「そうなるわね。本当の母親は、私が生まれた直後にいなくなってしまうたの。だから全く知らないの。」

「いつそのことを知ったの?」

「お母さんが二十歳になったとき。おじいさんが教えてくれたの。」

「シヨックじゃなかった?」

「それはシヨックだった。本当の母親やその事実を隠していたおじいさんとおばあさんを恨んだこともあったわ。でも、今は恨んではないの。」

「どうして?」

「それはね。あなたのおかげ。あなたが私のおなかにいると分かったとき、許そうと思ったの。もし、あの時お母さんのお母さんが私を産まなかったら、あなたのお母さんはこの世に存在しない。たった十ヶ月だけ、大事にお腹の中で育ててくれて、命をかけて産ん

でくれたことだけでもどんなに有り難いことか。そのおかげでお母さんは大切な宝物を授かることができた。それがあなたよ。」

私は胸が熱くなるのを感じた。

「あなたの命はあなただけのものではないの。これから先、あなたの命は受け継がれていくの。この『命のタスキ』をつなげてほしい。」

母の話を聞きながら、涙があふれてきた。

私は自分の部屋に入り、今日の出来事を振り返ってみた。そして鏡の前に立った。鏡に映る自分の姿を見ると、まだ見たことのない私の本当のおばあちゃんに会えるような気がした。

彩の国の道徳

「自分をみつめて」より



「何だっつていいんだあ」

父の名は、町田博勝。四十四歳。口ぐせは、「何だっつていいんだあ。」捨てゼリフのような一言。こう言われると、ほとんどの会話が終わってしまいます。

その上、食事の時は全くしゃべらず、家族の中でいつも一人だけ浮いています。まるで『となりのおじさん』が、家を間違えることに気付かないで、座っているみたい。家族に対して、全く無関心な父なのです。

その証拠に僕には四つ上の姉がいますが、僕達姉弟は、いまだかつて、「通知票を見せろ。」「テストの結果は。」などと言われたことがありません。成績はもちろんのこと、学校で賞をもらっても、ほめられた覚えが一度もないのです。だから、そんな父との間にはいつも距離がありました。

そんな中、姉が高校受験を迎えました。僕は、小学校

五年生でしたが、今でも鮮明に覚えています。家族四人でいたところ、姉が父に高校について相談し始めました。僕は父が姉に対してなんて答えるのか、とても興味を持ちました。すると、

「何だっつていいんだあ。どこだっつてえ。」

僕は驚きました。高校って大事なことで、親というのは、もっと心配するものなのではないか。さらに父は追い討ちをかけるように、

「自分なりに頑張ればいいんだから、要は自分が後悔しないこと。そうしたら何だっつて……。」

姉は最後まで聞かずに、リビングを出て行きました。父とはそれっきりでした。

発表までの数日間は本当にきつかったです。「落ちる・すべる」は絶対に禁句。テレビを見ていても笑う人はいない。普段おもしろい母のおしゃべりも、重い空気の中



に消えていきました。でも父だけは平然としていました。

発表の日、姉は見事志望校に合格しました。そしてその晩、家族で合格を祝った時のことです。父はいつもより帰りが早く、めずらしくお酒を飲み始めました。「おめでとう。おめでとう。」盛り上がる中、父は黙ってお酒を飲み続け、突然、

「俺はよっぽど、見に行きたかったあ。」

と話し出しました。電車通勤の父は発表が気になり、姉の受験した駅で、途中下車をしようとしたらしいのです。でも、会社の鍵を持っているのが父だけだったため、降りに降りられず、会社に向かったということでした。そして、

「頑張ってきたんだよなあ。いっぱい賞をもらって、三年間、一生懸命勉強してなあ。みんな自分の努力の証……。」

そう言っ、姉のことをじーっと見つめ、

「良かったなあ。本当によかったあ。」

その時、父の目から涙がこぼれました。あの父の目から。

「ありがとう。お父さん。」

姉も泣いた。母も。僕も。初めて、家族四人で泣いた夜でした。

ソファアの上で、大きないびきをかいて眠ってしまった父は、ものすごくお酒臭かったけれど、とても頼もしく

思えました。やはりお父さんだ、と僕は思いました。いつもの口ぐせは、どうでもいいという無関心な意味じゃない。父は僕たちに、決して強制することなく、自分の好きなように、思った通りにやってみろ。そしていつも大きな気持ちで見守ってくれていた。父の涙が、すべてを教えてくれました。

次の日から父は、何事もなかったように、澄ました顔で『となりのおじさん』をやっています。でも、僕も姉もそんな父に満足です。

お父さん一つお願いがあります。僕もいよいよ来年、高校受験です。僕の時もね、あの投げやりな言葉をかけてください。

「何だっ、いいんだあ」

そうしたら僕は、僕なりに頑張るよ。全部自分のためなんだから。でもやっぱり少しは、お父さんにほめられたいかな。頼りにしているよ。お父さん。これからお世話になります。

第二十九回少年の主張全国大会「文部科学大臣奨励賞受賞」

埼玉県公立中学校二年生

彩の国の道徳「自分をみつめて」より

豊かな日本をめざして

—近代日本資本主義の父・しみざわえいいち 渋沢栄一—



写真提供：渋沢史料館

日本は世界の中でも豊かな国と言われています。確かに物質的な豊かさでは他の国よりも豊かです。生活も便利になりました。

しかし、お金に関係した事件が多発しています。万引き、ひったくり、強盗詐欺事件など連日のように報道されています。大手の会社が、産地や賞味期限を偽装して消費者をだましたとされる事件、ネット社会が広がり、簡単に個人情報情報が流され、見知らぬ人からの誘惑や、振り込め詐欺などの事件に巻き込まれるケースも後を絶ちません。

犯罪者の中には、（だまされる方が悪い。）と言わんばかりの口口で、犯罪に手を染める大人もいます。普通感覚から「そんなうまい話があるはずがない。」と思うのですが、口口が巧妙なために簡単に口車にのってしまい、いつの間にか悪事の片棒を担いでいる若者もいると聞きます。

私たちは、このような今の日本の現状をどのように考え、生活していけばよいのでしょうか？

埼玉県には、深谷市出身の実業家で、「近代日本資本主義の父」といわれる渋沢栄一がいました。彼が生ま

れた一八四〇年は、まさに封建社会も終わりに近づいた時節でありましたが、当時はまだ士農工商といった階級制度で成り立っていた時代でした。栄一は農家で生まれ育ちましたが、この階級制度に疑問を感じていました。特に、お金を取引したりする商人の地位は低いものでした。彼は、やがて商工業の世界に身を置き、国を富まし、かんそんみんび官尊民卑を退け、商工業者の地位を向上させていくのです。

渋沢栄一は若い頃、幕臣としてパリ万国博に随行し、進んだヨーロッパ文化に感銘を受けたそうです。一八六九年に大蔵省に入省しましたが四年で辞めてしまいました。銀行を発足させた栄一は、民間の事業を盛んにしようと努力しました。少年時代から愛読していた『論語』を道しるべに商売を始めたのです。（社会に本来に必要な事業をおこして、みんなで、合理的に利益があるようにしよう。庶民が豊かになることが、国を豊かにすることになるのだ。）と確信していました。

とは言っても、「金儲けには手段を選ばない」というのもよくないことだ。だから、その中間にものごとの真理があると栄一は考えました。

「論語と算盤（そろばん）の間をめざす。」
（度量や品性に欠ける人は儲けることだけに走ってしまいがちである。商工業者はお金を扱う仕事だからその危険は大きい。商工業者にとっては、誠の心こそ必要なのであり、信用を得ることが大切なのだ。そう考えてみると、「論語と算盤（そろばん）」は対立するものではなく、むしろ両立させなければならないものなのだろう。）

この考え方を栄一は、「道德経済合一説」とよんで、生涯、自分の説を曲げませんでした。

栄一は、第一国立銀行の総監督を務めながら、事業を次々に実現させていきます。まず、取り組んだのが製紙会社でした。栄一は、

（日本はヨーロッパやアメリカの文明を輸入しなければ

ばならない。そこで第一に考えられるのが*文運だ。文運が進歩しなければ、一般社会の知識も発達しない。製紙が発達すれば、すべての事業も栄えるだろう。と、考えました。製紙事業の途中から、ガス事業にとりかかった栄一は、これを成功させると、次の目標を人造肥料にしました。農村出身の栄一でしたから、肥料のことはいつも気にしていました。

売り上げが上向いた明治三十一年五月三日、新工場が火事で焼けました。工場建設で莫大なお金をかけ、売り上げも伸びないので採算が合わない、八方ふさがりの中で解散の声もあがりました。

(国家のために、今、これを止めてはいけない……)

栄一は頑張り通しました。そして、第一国立銀行からお金を融通して難局を切り抜けることができました。

明治の初期、どんな事業も新政府の協力なくしては創設できません。事業のリスクがあまりにも大きすぎたからです。第一国立銀行は、新政府の後押しがあっ

たからこそ発足できたのです。財を蓄えるという気持ちがなく、人々の面倒見がいいという栄一の評判が、新政府の首脳の信頼を勝ち取った結果でした。

渋沢栄一。正に今日の豊かな日本を築いた第一人者です。日本を本当の豊かな社会にするために、「みんなの幸せ」を一番に考えた人でした。

彩の国の道徳「自分をみつめて」より

*官尊民卑：政府・官吏を尊んで人民をいやしむこと

*文運：文化、文明が発展しようとする機運。学問、

芸術が盛んに行われるさま。

行ってみよう、調べてみよう!

「渋沢栄一記念館」



深谷市下手計一二〇四
☎〇四八(五八七)一一〇〇



命、今生きていること

本当の幸せというものは、実は、自分の一番身近なところにある、ということをも、東日本大震災を通して知りました。それは、あたりまえだけど、お金では買えないもの、「生きている」ということです。

ぼくは、四月から埼玉県の中学校に転校してきました。それまでは、福島県の浪江町というところで、ごく普通の小学生として、毎日を送っていました。そう、あの日までは…。

三月十一日、あの大地震は起きました。そのとき、ぼくは帰りの会をしているところでした。机の下にかくれました。ものすごいゆれでした。震度六強などという地震は初めてで、そのあと、津波警報が発令されました。

ぼくたちは、下級生を連れて、近くの小高い山まで避難しました。後ろをふりむくと、遠くの方に大きな波が見えてき

ました。それは、黒い壁のようで、一体何が起こっているのかもわからず、恐怖だけが自分を支配していききました。ぼくたちは、ひたすら山の中を歩き、通りかかったトラックに乗せられて避難所まで行きました。

ぼくの住んでいた町は、津波にのまれ、大切な家、大切な家族、大切な愛犬・・・みんな一瞬に消えてしまいました。そして、ぼくのおばあちゃんは、二度と帰ってきませんでした。おばあちゃんとの思い出は、数え切れないほどあります。

ぼくのおばあちゃんは、年をとっていたけれど、ぼくに負けないくらい元気でした。毎朝、ぼくが学校に行くのを見守っていてくれていて、毎日、畑で野菜を育てていました。ぼくが学校から帰ってくると、おいしいご飯を作って待っていてくれました。ぼくは、帰ってくると、すぐにご飯にして、



その日にあったことを話しながら、楽しく晩ご飯を食べていました。ぼくは、野球をやっていました。試合の時は応援しに来てくれていました。時には、けんかもしたけれど、ぼくにとって大切なおばあちゃんでした。

人の命って何なのでしょう。ぼくは、「おばあちゃんの死」という、本当に辛い体験から、そのことを真剣に考えさせられました。「人の命の重さは、何物にも代えられない」という言葉を聞いたことがあります、まさにそのとおりです。

毎日元気に学校へ行き、友達と笑ったりけんかしたり…。勉強がめんどうくさいこともあるけれど、一生懸命机に向かったり…。家族と食事をしながら学校のことを話したり…。そんなあたりまえのことが、ある日突然消えてなくなってしまうのです。津波はすべてをうばいました。数え切れない人の命も…。一人一人の人に、これからの人生があったのです。夢や将来もあったのです。あたりまえで平凡な毎日も… あったはずですよ。

今、被災地はまだまだ大変な状況にあります。家族がまだ行方不明の人もいます。電気などが復旧していない所もあります。学校で勉強できない人たちもいます。ぼくは、勉強なんかしたくない、などという言葉を聞くと、腹が立ちます。み

なさんは、いつも一緒に勉強している友達が、ある日、突然津波にさらわれて消えてしまいう現実を想像することができませんか。毎日、あたりまえのようにみんなで勉強したり、部活をしたりしていることが、どれほど幸せなことか…。

ぼくのおばあちゃんは、もう二度と帰ってきません。どんなに辛くてもどんなに願っても帰っては来ないのです。おばあちゃんは、自分の命と引きかえに、ぼくに大切なことを教えてくれたのかもしれない。

ぼくは、将来、野球の選手になりたいです。初めは不安だらけの中学校生活でしたが、友達ができ、部活動も頑張っています。おばあちゃんの分も、生きることを奪われてしまった友達の分も生きていきます。何があっても負けずに、友達を大切にして、一日一日を本当に悔いのないように生きていきます。

天国のおばあちゃん、これからもぼくを見守ってね。

(生徒の作文より)

彩の国の道徳「心の絆」より

信じ続けければ、夢は必ず叶う

反骨精神。

これが、現在まで私自身が頑張ってこられた要因のひとつです。生まれ育ったのは東秩父村という田舎町。当時の身長一六四センチ、五十九キロという小さな身体も、野球をするのに恵まれているとはいえません。それでも、野球に挑戦し続けられているのは、都会の選手、身体の大きな選手たちに「絶対に負けたくない。」という強い気持ちがあるからです。私が中学生だった頃の上尾高校は、現在の強豪私学のように県内から身体の大きな有望選手が集まってきました。入学時に「お前なんか行っても無理だ。」と言われたこともあります。それでも、小さいなりに元気だけは負けないとか、全力疾走を怠らないなど、正しい姿勢で一生懸命野球に取り組もうという気持ちは人一倍持つてやってきました。その結果が、二年生の夏の甲子園出場につながったのだと思います。やる前からあきらめることは簡単です。でも、あきらめなければ、可能性は必ずあります。この考えが、指導者と

なった今も、私の原点になっています。

高校野球とはいえ、野球は勝負です。勝負事である以上、当然、勝ちにこだわります。そこには、公立も私立もありません。ですから、選手たちには「公立だから勝てなくてもしょうがない。」という気持ちを絶対に持たせないようにしています。そういう気持ちになるためには、「オレたちの野球が一番なんだ。」と思えることを何かひとつでも作らなければいけません。そこで、鷺宮高校では、「姿勢だけは一番になる。」と言っています。

ただ単に大声を出すのではなく、相手の目を見て心のこもったあいさつをする。ただ単にトンボをかけるのではなく、感謝の気持ちを込め、本当に平らにしようと思つてグラウンド整備をする。

ただ単にはきものヤカバンを揃えるのではなく、チームの心がひとつになるように揃える。

ただ単に道具の手入れをするだけではなく、買ってくれた



親御さんに感謝しながら手入れをする……。制服やユニホームをピシッと着るのも、それによって心が引き締まるからです。

勝つことは大事です。鷺宮高校も勝つことを目標にしています。でも、勝つことだけが全てではありません。

ですから、私が言い続けるのは、「いい選手である前にいい生徒であろう。いい生徒である前にいい人間であろう」、「うすっぺらな人間にはならない」、「たとえ野球の技術がなかったとしても、野球の道具を大切にすることや、自分を成長させてくれるグラウンドを常にきれいに整備する心を持ち続けられる野球選手になる。」ということ。

これができないようでは、いくら強くても周りから応援されるようなチームにはなりません。それでは、たとえ勝ったとしても、何も意味がないと思います。レギュラーだろうと、控え選手だろうと、全員が周囲から応援してもらえないような雰囲気、「あるべき姿」を持った野球部。それが、私の目指している野球です。

もうひとつ、私が選手たちに言い続けることが「苦手なことから逃げない」「苦手なことに対して頑張ろう」ということです。最近では、失敗することを恥ずかしいと思ったり、失敗を恐れてチャレンジしない選手が増えているように感じます。

でも、それは間違い。

むしろ、失敗や挫折した経験のある方が、その後の人生にプラスになることが多いように思います。失敗にめげず、苦手なことに挑戦し続けることができれば、選手としてだけではなく、人間としても成長できるからです。

そんな私の思いを体現してくれた選手がいました。二〇〇六年の夏に埼玉県大会で準優勝したときの主将です。一七〇センチ、六十五キロと小柄な彼は、決して恵まれた体格や能力の高い選手ではありませんでした。入学時は守備が苦手で、ゴロもフライも捕れない。自己表現するのが上手ではなく、打撃も、走塁も不器用という印象でした。

ところが、彼には誰よりも努力をするという才能がありました。一年生の頃から、毎日、毎日、最終電車に間に合うぎりぎりの時間まで残って自主練習をする。腰痛持ちのため、悪化しないようにとこちらがストップをかけても「そう言われるのは、自分が弱いからだ。」と言って、練習をやめませんでした。その練習も、一球たりともおろそかにしない。鬼気迫る表情でバットを振る姿からは「この練習をすれば、絶対にうまくなるんだ。」という強い思いを感じました。

人が見ているからやるわけではありません。自分自身に対する挑戦です。監督の私が怖いと感じるほど真摯な姿勢で練習に取り組むのを見ていて、「これだけ練習をやっているのなら、神様も味方してくれるだろう。」と思うようになりました。

二年生の秋までは代打でしたが、三年生の春の大会からは

四番を任せました。見る人の心を打つレベルの努力を重ねてきた彼こそ、鷺宮野球部を象徴する存在だと思ったからです。彼で負けたらしかたがない。彼にかけようという気持ちでした。

そして、夏。

彼は一番いいところで活躍してくれました。優勝候補筆頭といわれていた準々決勝の春日部共栄戦の九回裏に、サヨナラ安打を打ったのです。残念ながら甲子園には届きませんでした。だが、彼は大会後、こう言っていました。

「できなかったことができるようになること、それがうれいんです。できたときのうれしさを考えたら、練習することが苦になりません。努力することが好きになれた高校野球でした。」

できないからといって、逃げない。できないからこそ、できるようになるまで頑張る。結果的に、彼は入学時の私の予想をはるかに上回る選手に成長してくれました。

私の好きな言葉は「ただひたすらひたむきに」。

まさにそれを行動で表してくれたのが彼でした。

努力し続けること、挑戦し続けることの大切さや意味、高校生の能力には限界がないことを改めて彼から教えてもらいました。

埼玉県には、全国区の強豪校がいくつもあります。それでも、甲子園に出場し、甲子園で勝ち進むという目標に挑戦し

続ける気持ちは変わりません。

埼玉県で上位に入り、「公立なのによくやった。」と言っていたこともありますが、それ自体は目標ではないのです。あいさつや礼儀、身だしなみ、グラウンドや道具を大切にす
る心、スタンドを含めて一体となる全員野球、そして自分たちの野球が一番なのだという誇り……。

それらはどこの高校よりも上回りたい。ただ勝つのではない、こういう野球部が勝つべきなのだとすることを証明したいと思っています。

鷺宮高校の野球を観て、子どもたちが「高校野球ってすごいな。このお兄さんたちすごいな。」と思ってくれたり、大人でも子どもでも観てくれた人が「高校生の頑張りはずい
な。」と思ってくれるだけでもいい。

高校野球のあるべき姿で戦い、そして勝つ。それによって、感動してもらったり、世の中に社会的貢献ができればいいな
と思っています。

信じ続ければ、夢は必ず叶う。

この思いを胸に、これからも選手たちと一緒に、全力で走り抜けたと思います。

(埼玉県立高等学校教諭)

彩の国の道徳「明日をめざして」より



埼玉県独自の道徳教材 家庭用「彩の国の道徳」

家庭用「彩の国の道徳」は、平成22年度から埼玉県内の小・中・高等学校で活用が
始まった本県独自の道徳教材「彩の国の道徳」(写真)の中から、保護者の皆様にお読み
いただき、家庭で話題にさせていただきたい資料を集めたものです。

例えば、保護者からこのように子供に問いかけてみてはいかがでしょうか。



友達のことでは悩んでいることはない？



「静六の勇気」や「わたしって何」を
親子で読んで、一緒に考えてみましょう。



どうして靴をそろえるんだと思う？



「父の一言」を親子で読んで、一緒に
考えてみましょう。



保護者が役になりきって授業に参加している様子

こうした何気ない保護者からの問いかけをとおして、子供が自分の考えをしっかりと持つことは、
夢や希望に向かってたくましく生きていくために
とても大切なことです。是非、家庭用「彩の国の
道徳」の読み物資料やコラムを話題にして、親子
で一緒に考えてみてください。

また、学校の授業参観などで道徳の時間が公開
された時には、保護者の皆様も、道徳の授業に参
加してはいかがでしょうか。

家庭でも道徳の授業のことを話題にして親子の
会話に花を咲かせてみると、新たな気づきの中で
親子の絆がさらに深まることと思います。



わたしたちの埼玉県



県民の鳥



国の天然記念物
シラコバト

県の木



ケヤキ

県の花



サクラソウ

県の蝶



ミドリシジミ

県章



まが玉は、古代人が装飾品などとして大切にしましたものです。埼玉県名の由来である「幸魂（さきみたま）」の「魂」は、「玉」の意味でもあり、まが玉は、埼玉県にゆかりの深いものとなっています。また、16個のまが玉を円形に配置し、「太陽」「発展」「情熱」「力強さ」を表しています。

県の魚



ムサトミヨ

埼玉県歌

- | | |
|---|--|
| <p>1 秩父の雲の むらさきに
風もみどりの むさし野よ
恵み豊かな この山河
われら生まれて ここにあり
おお 埼玉 埼玉 輝く 埼玉</p> | <p>3 日に日に進む 産業に
こぞのちからも たくましく
希望はもえる このあした
われら明るく ここにあり
おお 埼玉 埼玉 輝く 埼玉</p> |
| <p>2 古き伝統 新しき
生命をこめて しあわせの
未来をひらく この文化
われらつどいて ここにあり
おお 埼玉 埼玉 輝く 埼玉</p> | <p>4 北に大利根 荒川は
南をめくり 人和して
県旗はまがたま この理想
われらちかって ここにあり
おお 埼玉 埼玉 輝く 埼玉</p> |



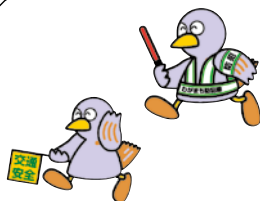
埼玉県がナンバーワン!

皆さんは、埼玉県の**日本一**をどれだけ知っていますか。

県の面積に占める河川の面積が3.9%で**日本一**です。3,798平方キロの埼玉県を、利根川や荒川などが流れています。



3世紀半ばから7世紀末頃までの古墳時代。行田市にある「丸墓山古墳」は直径105mの円墳で**日本一**です。



埼玉県でスポーツといえばサッカー。「埼玉スタジアム2002」はサッカー専用スタジアムとして63,700人収容の**日本一**です。

外出の時は、お天気が気になりますね。なんと埼玉県は、一年間の快晴日数が56日で**日本一**です。
(平成24年の調査)

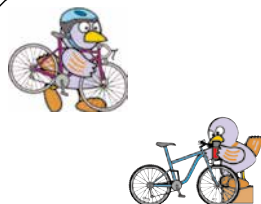
安心・安全なまちづくりは、防犯体制が大切です。埼玉県は、自主防犯ボランティア団体の数が、5,633で**日本一**です。
(平成24年の調査)



伝統的手工芸品である節句人形（ひな人形等）の出荷額が**日本一**。さいたま市・鴻巣市が有名ですね。
(平成23年の調査)

園芸・農作物も埼玉県の名産です。さといも・こまつな・ゆり・パンジーの産出額が**日本一**です。
(平成24年の調査)

自転車王国の埼玉県。自転車フレームの製造品出荷額が**日本一**。交通ルールを守って運転してくださいね。(平成23年の調査)



※平成〇〇年の調査と記載のあるものは、埼玉県統計課のホームページから引用しています。

江戸時代に盲目の国学者として活躍

はなわ ほきいち
塙 保己一 (1746 ~ 1821)

塙保己一は、延享3年(1746)に保木野村、現在の本庄市に生まれました。7歳で病のため失明し、12歳で母を亡くしました。15歳の時に江戸へ出て、その後学問の道を目指しました。

安永8年(1779)から、全国に散らばっていた多くの古い記録や史料を集めて分類、整理を41年間に渡って行い、666冊にまとめて出版するという大事業を成し遂げました。

これが『群書類従』であり、今でも歴史研究に活用されています。

ヘレン・ケラーが来日して講演した際、塙保己一を「私の人生の目標とした人であり、心の支えです。」と語っています。

📖資料 P24 「盲目の学者」



写真提供：本庄市教育委員会

日本の資本主義の基礎を築いた大実業家

しぶさわ えいいち
渋沢 栄一 (1840 ~ 1931)

渋沢栄一は、天保11年(1840)に血洗島村、現在の深谷市に生まれました。

慶応3年(1867)に渡欧して西欧先進諸国を歴訪し、経済制度や近代的技術を目の当たりにしました。帰国後、明治新政府に出仕して、租税事務の処理、新貨条例・造幣規則、国立銀行条例の起草立案などに当たりますが、ほどなく実業界に転進しました。

常に「論語」を処世の基本理念とし、道徳経済合一説を唱え、第一国立銀行をはじめ、鉄道・製紙・造船など500社にものぼる企業の設立・育成に関わりました。また、福祉や教育などの社会事業にも熱心に取り組み、600余りの社会事業に力を注ぎました。

📖資料 P18 「一輪の花」、資料 P41 「豊かな日本をめざして」



写真提供：渋沢史料館

日本で最初の公認の女性医師

おぎの ぎんこ
荻野 吟子 (1851 ~ 1913)

荻野吟子は、嘉永4年(1851)に俵瀬村、現在の熊谷市に生まれました。東京の病院に入院し、婦人科の治療を受けたことがきっかけで、女性医師の必要性を痛感し、医師を目指して勉学に励みました。

しかし、当時、医師開業試験は女性に認められておらず、そのため制度の改革から取り組み、自身で拓いた試験の道を第一回目で合格し、日本で最初の公認の女性医師となりました。開業医として熱心に治療にあたったほか、女性の地位向上や衛生知識の普及にも大きく貢献しました。



写真提供：熊谷市教育委員会

📖資料P22 「道ひとすじに」

日本の公園の父

ほんだ せいりく
本多 静六 (1866 ~ 1952)

慶応2年(1866)に河原井村、現在の久喜市に生まれました。

明治32年(1899)わが国最初の林学博士となり、近代林学の基礎を築きました。

また、日比谷公園や大宮公園の設計、明治神宮の森の造営などを通じて、近代的な造園技術の発展に大きな足跡を残しました。

さらに、昭和5年、私財を投じて取得した秩父市の中津川地域の山林2,631.52haを県に寄付しました。ここから生じる収益をもとに昭和29年、「本多静六博士奨学金」が設けられ、平成25年度までに2,000人を超える学生に貸与されています。



写真提供：久喜市

📖資料P8 「静六の勇気」

埼玉県の自然と伝統文化

埼玉県には、自然の美しさが見られる場所がたくさんあります。また、昔から受け継がれてきた伝統や文化があり、その美しい風景も見られます。

美しいものを感じる心を大切にし、伝統を受け継ぐ人たちの思いを感じ取りましょう。



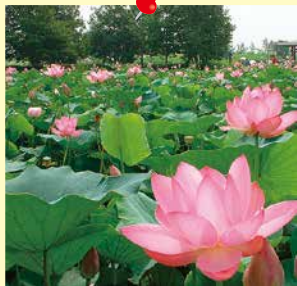
日高市の巾着田



史跡 砂巻 日高市



幸手市の桜並木



行田市の古代ハス



SAITAMA

べに花 (桶川市)



桶川市のベニバナ



長瀬町のライン下り



秩父市の芝桜

祝



祝



かんざいんしょうてんどう

平成 24 年 7 月、熊谷市の歓喜院聖天堂が国宝に、平成 26 年 11 月、小川町・東秩父村の和紙（細川紙）がユネスコ無形文化遺産にそれぞれ指定されました。

この他にも、県内には有数の名所や名産品があります。ぜひ家族でお出かけください。



加須市のこのほり



鴻巣市のひな人形



入間市・所沢市・狭山市などの茶摘み



小惑星 コバトン



川越市の時の鐘



秩父市の夜祭



春日部市の大凧

◎ 埼玉県では小学校入学までに子供たちに身に付けてほしいことを取りまとめています。



埼玉県のマスコット
コバトン



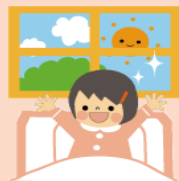
子育ての目安「3つのめばえ」

～小学校入学までに子供たちに身に付けてほしいこと～

子供の育ちは一人一人異なります。特に、幼児期は発達の個人差が大きいと言われています。お子さんの育ちを長い目で見つめながら、生活の中で着実に身に付けていくことができるように、生活環境やかかわり方に配慮していきましょう。

生活

- ◇ 健康で安全な生活をする
- ◇ 自分のことは自分でする
- ◇ 物を大切に



他者との関係

- ◇ 人とかかわる力を身に付ける
- ◇ 言葉で伝え合う
- ◇ きまりや約束を守る



興味・関心

- ◇ 好奇心や探求心をもって
- ◇ いろいろなものにかかわる
- ◇ 文字や数量などの感覚を豊かにする
- ◇ 自分の思いを表現する



かてい 家庭向けリーフレット

子育ての「さ・し・す・せ・そ」

さ

支える

子供はどんなに大きくなっても、親の支えは必要です。親は頼れる存在なのです。

し

信じる

子供は失敗することもあります。信じて待つ心のゆとりを持ちましょう。

す

すすめる

親として、人生の先輩として、子供に生きるためのヒントやアドバイスを与えましょう。

せ

背中教える

子供は親の姿をよく見て成長していきます。子供は口で言うよりも、時には親がやって見せる姿がとても大切です。

そ

そっと見守る

子供もいつかは親から離れ、独立立ちます。そっと見守り、子供を応援してあげましょう。

◎ 「だめなことはだめ」ということを家庭で確認しましょう。

してはならないことがある!

だれもが、自分の夢をかなえたいと願っています。
そのみんなの夢を大切にするためにも、
してはならないことがあります。
してはならないことをしないこと。そして…、
『**夢に向かって!**』はばたこう!



人の物を
とっては
いけません。

うそを
ついたり
いけません。

人を
いじめ
いけません。

人の心や
傷つけて
いけません。

悪いことを しては いけません!
ならぬことは、ならぬものなのです。



◎ 身に付けさせたい生活習慣や学習習慣について、家庭で確認してみましょう。

「規律ある態度」を身につけよう!

1 時刻を守る

〈 家庭では 〉

- ① 登下校時刻を守ることができていますか。
- ② 授業や活動の始まる時刻を守ることができていますか。

朝は自分で起きる習慣を身につけ、約束した時刻に家に帰るなど、時刻を守って生活しましょう。

2 身の回りの整理整頓をする

〈 家庭では 〉

- ③ 脱いだ履き物のかかとをそろえることができていますか。
- ④ 机やロッカーの中の整理整頓ができていますか。

脱いだくつをそろえたり、自分の衣服をたたんだり、部屋をかたづけたりするなど、自然にできるようにしましょう。

3 進んであいさつや返事をする

〈 家庭では 〉

- ⑤ 自分からはっきりあいさつをすることができていますか。
- ⑥ 名前を呼ばれたら、「はい」とはっきり返事ができていますか。

朝「おはよう」のあいさつから一日をはじめ、家族どうしの呼び声に、「はい」と返事をしましょう。

4 ていねいな言葉づかいを身につける

〈 家庭では 〉

- ⑦ 時と場に応じたていねいな言葉づかいができていますか。
- ⑧ 相手の気持ちを考え、やさしい言葉づかいができていますか。

日常の会話の他、お客様や電話での会話など、相手やその場にふさわしい言葉をつかきましょう。

5 学習のきまりを守る

〈 家庭では 〉

- ⑨ 学習の準備を整え、授業にのぞむことができていますか。
- ⑩ 先生の話や友達の発表をしっかりと聞き、自分の考えを伝えることができていますか。

学習の準備ができたら時間を決めて、宿題や家庭学習をきちんとできるようにしましょう。

6 生活のきまりを守る

〈 家庭では 〉

- ⑪ 人の集まる場所では静かにし、姿勢を正すことができていますか。
- ⑫ 進んで掃除をし、学校をきれいにすることができていますか。

家の仕事（お手伝い）を分たし、きめられた仕事をしたり、わが家のきまりを家族みんなで守りましょう。

◎ 子供に対して、どんな言葉かけをしているか振り返ってみましょう。

子供のほめ方、しかり方

— 子供に基本的な生活習慣を身につけさせる魔法の言葉 —

基本的な生活習慣を子供たちに身につけさせるためには、大人の言葉かけが大切です。してはならないことについては厳しくしかり、できたときにはほめて励ましながら、粘り強く接することが必要です。

努力している子 よく身につけている子

(言葉かけの例)

「○○ちゃんのがんばっている姿は、弟や妹のお手本になっているよ。」
「すごく成長しているね。お母さんはとてもうれしいよ。」
「いつも努力しているからできるんだね。」

◎言葉や態度に喜びをあらわして心をこめてほめましょう。



努力しているが なかなか身につかない子

(言葉かけの例)

「努力している姿は立派だよ。」
「あきらめないで。一緒にがんばろう。」
「少しずつ○○ができるようになってきているね。努力が実っているね。」
「もう少しでできるようになるよ。」

◎少しの成長でもほめてあげたり、根気強く取り組もうという気持ちにさせたりする言葉をかけましょう。

身につけているのに身につけていないと 厳しく評価している子 (自信がもてない子)

(言葉かけの例)

「今のままでいいんだよ。十分だよ。」
「すごく成長しているよ。自信をもって。」
「○○ちゃんのこういうところ (具体的に) が、すばらしいよ。感心するよ。」

◎自分に厳しい子や自信がもてない子には、どこがどうよいのかほめてあげ、自信や安心感を与える言葉をかけましょう。

努力しようとしないう子 身につけようという意識が低い子

(言葉かけの例)

「失敗したっていいよ。やってみよう。」
「お母さんと一緒にがんばってみよう。」
「○○ちゃんならきっとできるよ。」
「このままでいいのかな。」

◎意識の低い子には、自信をもたせたり、励ましたりする言葉をかけ、自らやってみようという気持ちにさせましょう。



約束やルールを守らなかつたり、 人に迷惑をかけたりにしている子

(言葉かけの例)

「約束やルールの意味をよく考えてごらん。」
「自分のとった行動はそれでよかったの。」
「○○ちゃんのその態度や行動は、みんなの迷惑になっているよ。」
「○○ちゃんのことを大切に思っているから話をするんだよ。」

◎子供の人格を否定せず、誤った行動についてしかりましょう。



子供のほめ方、しかり方

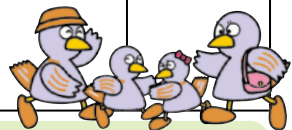
- ◎ほめる時もしかる時も根底にあるのは、子供と保護者の信頼関係です。子供に積極的に声をかけ、共感的な人間関係をはぐくみましょう。
- ◎子供への愛情や期待が子供の心に伝わるよう、本気になってほめること、しかることが大切です。
- ◎どこがどうよいのか、具体的にほめてあげましょう。
- ◎しかった後の見守りや見届けを大切にしましょう。



家族で確認、家庭のルール!



○ 家族とあいさつをしていますか。	はい	いいえ
○ 家族と会話をしていますか。	はい	いいえ
○ 家の手伝いをしていますか。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">具体的に書いてみましょう。</div>	はい	いいえ
○ 出かけるときは、誰と、どこへ出かけて、何時頃帰るのか、家族に伝えていますか。	はい	いいえ
○ お小遣いなど、お金の管理をしっかりしていますか。	はい	いいえ
○ スマートフォンや携帯、SNSの使い方のルールを、家族で決めていますか。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">具体的に書いてみましょう。</div>	はい	いいえ
○ ゲームをするときのルールを、家族で決めていますか。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">具体的に書いてみましょう。</div>	はい	いいえ
○ トラブルに巻き込まれたときにどうするか、家族で話し合っていますか。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">具体的に書いてみましょう。</div>	はい	いいえ
○ 災害時にどうするか、家族で話し合っていますか。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">具体的に書いてみましょう。</div>	はい	いいえ



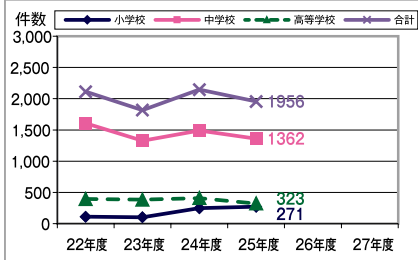
※家庭で話し合う際には、このページをコピーするなどして活用してください。

今、子供たちの状況は……

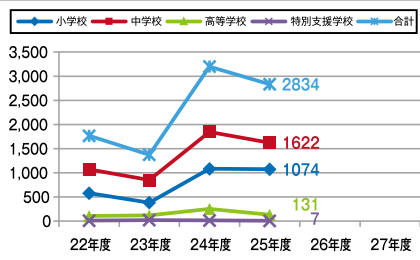
－ 暴力行為・いじめ・携帯電話の現状 －

暴力やいじめのない明るく安心して学べる環境を作りましょう！

【埼玉県公立学校における暴力行為の発生件数の推移】



【埼玉県公立学校におけるいじめの件数の推移】



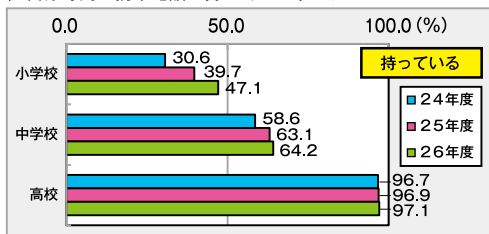
- ・子供が人として許されないことをした時は「だめなものだめ」と真剣に叱るとともに、子供の心の声にしっかりと目を傾けてください。親子のコミュニケーションを大切にしましょう！
- ・いじめは、人間として許されないひきょうな行為です。しがし、どの学校にも、どの子供にも起こりうるものです。社会全体で子供たちを見守っていきましょう！

◆平成25年度文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果」より◆

携帯電話等は正しく使いましょう！

子供たちの携帯電話等の所有率は高い傾向にあります。ご家庭で、使い方について話し合しましょう。

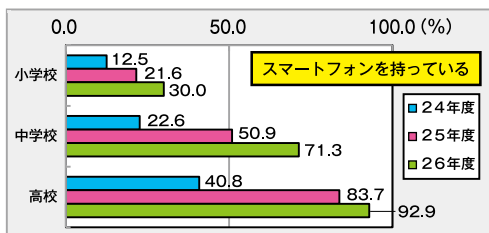
(1) 自分専用の携帯電話を持っていますか。



ネット上のトラブル例

- ・掲示板やネットでの悪口
- ・チェーンメール
- ・心当たりのない利用料金の請求
- ・メール上の書き間違いによるトラブル
- ・宣伝などの迷惑メール 等

(2) (1)で持っている人のうち自分専用のスマートフォンを持っていますか。

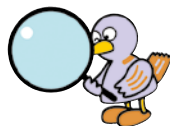


携帯電話(スマホ)等の使用に当たっては、家庭内でルールを決めるなど正しく使わせましょう。



◆平成26年度埼玉県教育庁生徒指導課「携帯電話等に関する調査結果」より◆

家庭用 いじめ発見チェックシート



お子様にちょっとした変化の様子が見られないか、
下のシートを参考に確認してみてください。

1 起床から登校前

- ◇ 布団からなかなか出てこなかったり、具合が悪そうである。
- ◇ けだるそうな、疲れた表情である。
- ◇ いつもと違って朝食を食べようとしない。
- ◇ ぼんやりしたり、ふさぎこんでいたりする。
- ◇ 学校に行くのを渋ったり、登校班の集合場所に行きたがらない。

2 登 校 中

- ◇ 友達の荷物をもたされている。
- ◇ 一人で登校するようになる。
- ◇ 遠回りして登校している。
- ◇ 途中で家に戻ってくる。

3 帰 宅 時

- ◇ 理由のはっきりしない汚れ、破れやボタンのほつれがある。
- ◇ あざや擦り傷があってもその理由を言わない。
- ◇ 自分の部屋に駆け込み、なかなか出てこない。
- ◇ いつもより帰宅が遅い。
- ◇ 自転車や持ち物等が壊されている。
- ◇ 学校の話をしなくなる。
- ◇ 外出したまらない。
- ◇ プリントが破れている、道具や持ち物に落書きがある。

4 夕食から就寝まで

- ◇ 食欲がない。
- ◇ 特定の友達に対する言葉遣いが不自然にいていぬいである。
- ◇ 友達の話をしなくなったり、いつも遊んでいる友達と遊ばなくなったりする。
- ◇ お金の使い方が荒くなったり、無断で持ち出すようになる。
- ◇ 部屋にある持ち物や学用品がなくなっていく。
- ◇ 買い与えた覚えのない品物を持っている。
- ◇ メールをこっそり見る、鳴っている携帯電話に出たがらない。
- ◇ 部屋に閉じこもりがちで、好きな趣味などにも興じなくなる。
- ◇ 家族の者と話をしなくなる。
- ◇ いじめの話をするとう強く否定する。
- ◇ 弟や妹をいじめするなど、急に乱暴になったり情緒不安定になる。
- ◇ 疲れた様子であったり、なかなか寝つけなかったりしている。
- ◇ 普段より暗かったり、逆に明るく演じたりする感じがする。



埼玉県のマスコット
コバトン